

貝坂倶楽部

—季刊 2014 秋号 通巻第 30 号—



樋口一葉にゆかりのある平河町一丁目。
江戸名所図会には「この地は昔から甲州
街道にしてその路傍にありし一里塚を土人、
甲斐塚とよびならわせしとなり」とある。貝
塚であったのが現在定説となっている。



つくし
くらぶ

発行 NPO つくしくらぶ

目次

寄稿者一行紹介

アイガー北壁からチベットへ	藤原 英郎	3
ドイツの二つの「3B」	関 敦	6
作文の履歴	高松 良晴	8
日本語でエエやん～	田村 徹	12
新潟・高校青春記	高橋 郁郎	14
離す、放す、話す	高松 泰代	17
Tea Time: 習い事		20
転載：この子はわがままでしょうか？	長阿彌 幹雄	23
阿武隈川だより：消しゴムで消せない仕事	渡辺 成典	26
余市：小樽からオプションツアー	藤原 昌子	29
サウディアラビア訪問記（4）	藤井 能成	31
特別寄稿：震災レポート	渡辺 陽一	35

寄稿者一行紹介

藤原 英郎	銀行員、現役時代に英国、スイスに勤務
関 敦	非鉄金属メーカー機械技術者
高松 良晴	国鉄マン、鉄道建設改良工事に従事
田村 徹	研究員→国連環境計画局→大学教授→環境コンサルタント
高橋 育郎	国鉄マン、日本童謡協会会員、日本橋「心のふるさとを歌う会」代表
高松 泰代	NPO つくしくらぶ 理事長
長阿彌 幹雄	教育文化研究所 代表
渡辺 成典	民生委員
藤原 昌子	NPOつくしくらぶ 副理事長
藤井 能成	化学系技術者、分離膜研究開発に従事
渡辺 陽一	北東公庫（現日本政策投資銀行）元理事

－出てみてわかった世界－

アイガー北壁からチベットへ

藤原 英郎

もう数十年前になるがスイスのチューリヒに滞在していたことがある。ある夏、ようやく取れた休暇に、家族とともにグリンデル・ワルトを経てクライネ・シャイデックに遊んだ。ここはアイガー、メンヒ、ユングフラウの三座を眼前にした大きな乗換駅である。すぐそばにアイガー北壁がそびえている。この3つの山は、夏でも雪が多く、白く輝いている。異彩を放っているのがアイガー北壁で、岩肌は黒く南に面しており、絶壁に近くそそり立ち、そのためほとんど雪がない。クライネ・シャイデックでユングフラウ鉄道に乗り換え、3454メートルの高さにあるユングフラウヨッホ駅まで登り、駅構内のエレベーターで、展望台に上りアレッチ氷河に出た。

ここには何度も日本の会社関係者をご案内したことがあるが、この雄大な山々と、有名な鉄道を一度家族ともどもゆっくりと見てみたいものだと思うたしだいである。終着点であるユングフラウヨッホ駅は地下構造であり、当時、すでに氷の部屋等の施設があった。気温がかなり低く、とくに外に出るには冬の服装が必要であった。高血圧にご注意の表示があり、簡単な診療室もあった。

ユングフラウ鉄道は1896年に建設開始され、1912年8月に完成された。途中駅はアイガーグレッチャーまでは地上、そこからトンネルに入り、アイガーヴァント、アイスメア、ユングフラウヨッホの3駅はトンネルの中にある。このうちアイガーヴァント(ドイツ語でアイガー北壁の意味)駅では上り列車のみ乗客のためしばらく停車する。アイガー北壁のただ中であり、展望台が設けられていて、乗客は電車から降り、北壁の内側から外を見ることができる。また下から双眼鏡をのぞけば、北壁にこの展望台が開いているのがかすかに見える。この北壁の駅は開設当初から設けられていた。

すでに何度か見ているのだが、それでも、また見たくなる2枚のDVDがある。1枚はドイツ・オーストリア・スイス合作による2010年に公開された「アイガー北壁」である。これによれば、ナチス政権は1936年10月のベルリン・オリンピック大会に、アイガー北壁の登頂に成功したものに金メダルを授与すると約束していた。アイガーそのものは1865年に登頂されていたが、北壁からの登頂は凍死が相次ぎままだであった。そこで7月にドイツ軍猟兵隊のクルツとヒンターシュトイサーの2人、オーストリア隊のライナーとアンゲラーの2人が別個に参加した。当時はクライネシャイデックにはすでにホテル

があつたが、ここには泊まらず、各隊はアイガー北壁前のテントに暮らした。2隊ともほぼ同じルートをめざした。しかし天候が悪化し、ビバークを繰り返すこととなった。アンゲラーが負傷したので、2隊は相談の結果、登頂をあきらめて、下山することを決定した。

ここで利用されたのが、アイガーヴァント駅の北壁の展望台である。懸垂下降をして、ここに避難することを試みたが、クルツを除く3人が墜落などで相次いで亡くなった。クルツ自身もザイルの結び目が引っかかるという状況になり、ザイルにぶら下がったまま「もうだめだ」の一言を残して力尽きる。急ぎ編成された救助隊のわずか数メートル上であつた。救助隊もまた北壁の展望台から救助しようとしていた。これが映画「アイガー北壁」のあらましである。

アイガー北壁初登頂は、1938年7月に実行された。ドイツ隊によるヘックマイヤーとフェルクの両氏、オーストリア隊のハインリッヒ・ハラールとカスバレクの両氏であつた。両隊は登頂開始時は別々のパーティだったが、後から登頂に挑んだドイツ隊が、オーストリア隊に追いついた時点で同一パーティを組み、今度は何の事故もなく、全員が初登頂に成功した。この功績によりハインリッヒ・ハラールはドイツのナンガ・パルバット遠征隊への参加が認められ、ヒマラヤへ行くこととなった。

もう一つの映画 DVD1997年公開のアメリカ映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」(ブラッド・ピット主演、JJアノ-監督)と、その原作となったハインリッヒ・ハラールの「チベットの七年」(翻訳は白水社刊)によると、1939年、ナンガ・パルバットの新しい登頂ルートを見つけたが、登頂そのものは嵐と雪崩のために失敗した。遠征隊は、イギリス領インド帝国で、ヨーロッパへの帰還のために船を待っていた。しかしこの時、第2次世界大戦が勃発し、ドイツ隊の全員は敵対国の国民として拘禁されることとなり、リムンバイの抑留所で抑留された。その後、ヒマラヤに近いデラドゥーンに移されたハインリッヒ・ハラールは、そこでドイツ隊の1人と脱走に成功し、ネラン、ツァンチョクラ峠を越え、チベットへと逃れる。チベットの警察官による国境の警備は厳しかったが、巡礼の一行に紛れて逃れ、首都のラサに到着した。ここでハラールは大臣と外務省の役人と知り合い、その縁でダライ・ラマ14世の家庭教師となる。

ダライ・ラマ14世は1935年7月生まれ、1940年に即位したばかりであつた。彼は勉学中であつたが、好奇心が非常に強かつた。望遠鏡、自動車、映写機等を所有し、その使い方に興味を示した。ハラールは家庭教師としてそ

れらの使い方等を教えた。1945年4月末ドイツは敗北し、ヨーロッパに平和が戻った。ハラーはこの時、測量技師としてラサの都市計画に従事していた。

この映画は後半、第2次大戦後に出現した中華人民共和国によるチベット侵攻の様子が詳しく描かれる。共産軍による圧倒的な軍事力に対して、チベット軍の前近代的戦力はひとたまりもない。ラサ郊外に飛行場を建設させ、飛行機で降り立った共産軍は、ダライ・ラマ14世の面前で、乱暴狼藉を繰り返し、チベットを支配した。

この映画に描かれた後のダライ・ラマ14世は、1959年にインドへ亡命した。その後活動は著しく、1989年にはノーベル平和賞を授与された。来日した経験もある。アメリカ関係では、バラク・オバマ大統領他とも面談している。

ハインリヒ・ハラーは1951年にオーストリアに戻る事となるが、93才まで長命に過ごし、2006年1月に死去した。インドへ亡命したダライ・ラマ14世ともなにか面会している。それにしても、アイガー北壁初登頂に成功し、ヒマラヤへ、そしてダライ・ラマ14世やチベットのかかわりなど、彼は数奇な運命を生きたものだと思う。



左からアイガー、メン日、ユングフラウ (Wikipedia より)

ドイツの二つの「3B」

関 敦

ドイツには二つの有名な「3B」がある。ひとつは1300万人の犠牲者をだした第一次世界大戦、その開戦の引き金にもなった「政策」であり、もうひとつは世界のクラシック音楽ファンを楽しませてくれている三人の「大作曲家」である。

今年には第一次世界大戦の開戦から100年目にあたり、欧州では関連するテレビ番組が数多く放送されているらしい。そのうちのひとつ、ZDF(第二ドイツテレビ)が制作したドキュメンタリー番組をNHK-B Sで見ることができた。



第一次大戦は人類が初めて経験した大量殺戮の戦争、機関銃・大砲・戦車・飛行機・軍艦などの機械と人間が初めて戦った悲惨な戦争、その戦争の原因や休戦までの経緯を当時の映像をまじえて放送してくれた。その映像の中に、第二次大戦でも著名な軍人、イギリスのモンゴメリー、フランスのドゴール、ドイツのヒットラーやロンメル、そしてアメリカのパットンなどが第一次大戦の若き将校として参戦していた。その顔ぶれを見ていると、欧州で始まった第二次大戦は「第一次大戦の続編かもしれない」という感じさえ持った。

ところで、冒頭に記したドイツの「3B」政策とは、ヴィルヘルムII世率いるドイツ帝国が立案したもの。ドイツのBerlin(ベルリン)、トルコのByzantium(ビザンティウム、現在のイスタンブール)とイラクのBaghdad(バグダード)の三都市を鉄道でつなぐ壮大な計画だった。産業革命によって登場した蒸気機関車、鉄道輸送は一度に大量の兵力を移動できるので、他国にとっては大きな脅威となる。3B政策はフランスやイギリスの反対で実現には至らなかった。でも、ヨーロッパの列強国は敵対国からの外交上の挑発に対して、譲歩するより戦うことを選択したのである。フランス、ロシア、イギリスによる三国協商とドイツ、オーストリア、イタリアの三国同盟が対立し、セルビアの首都、サラエボで起きたオーストリア帝国の皇太子暗殺事件をきっかけに第一次世界大戦に突入し、悲惨な大量殺戮が始まった。

現在のドイツ国歌の歌詞は Einigkeit und Recht und Freiheit für das deutsche Vaterland (統一と正義と自由を父なる祖国ドイツのために)で始まる、とても格調の高いもの。でも、これは三番の歌詞、一番の歌詞は Deutschland, Deutschland über alles, Über alles in der Welt (ドイツよ、ドイツよ、すべてのものの上にあれ、この世のすべてのものの上にあれ)である。ヒットラーは世界に冠たるドイツという歌詞が大好きで、この一番を国歌としたが、現在は三番の歌詞が使われている。作曲は「交響曲の父」として知られているハイドン、弦楽四重奏曲「皇帝」の中の有名なメロディ

一が使われている。歌詞よりも曲の方が格調高いと思う。

もうひとつの「3B」はドイツ生まれのクラシック音楽の作曲家、Bach(バッハ)、Beethoven(ベートーヴェン)と Brahms(ブラームス)の三人のこと。クラシック音楽の大作曲家として、この三人に異論はない。選ばれたのは1870年頃、選んだのはドイツの大指揮者だったハンス・フォン・ビューローである。右の写真は若き日のブラームス、髭はなく、なかなかのイケメン。ブラームスは1833年生まれ、亡くなったのは1897年。自身が「3B」としてバッハ、ベートーヴェンの後継者として指名されたのは、まだ40才前後、本人はどう感じたのだろう。69連勝の双葉山、32回優勝の大鵬の後継者といわれている横綱・白鵬は相当に重圧を感じているらしいので、ブラームスも肩の荷が重かったに違いない。



ところで、ビューローはドイツの指揮者兼ピアニスト、現在の専任指揮者の先駆的存在である。当時のドイツとオーストリアの音楽界はワーグナー派とブラームス派に二分されており、ビューローは当初、ワーグナー派の代表だった。リストの娘コジマと結婚したが、その彼女がワーグナーと恋愛関係に陥り、ビューローと離婚。その後、ビューローはワーグナーから離れ、ブラームスとの親交が深まっていく。ブラームスの交響曲第一番を「ベートーヴェンの交響曲第十番」、交響曲第二番をブラームスの「田園」と呼び絶賛、交響曲第四番の初演の指揮もした。そして、ブラームスをバッハ、ベートーヴェンの後継者に指名したのだけど、当時は、不倫事件を暴露して大衆を喜ばせる現在のような週刊誌がなく、不倫事件との関係は不明。

ルネサンス発祥の地イタリア、それに続いて文化の華が開いたフランスといったラテン国家と比べ、ドイツは繰り返す内戦で疲弊し、ゲルマン国家は長い間、文化後進国と言われていた。18世紀に入りゲーテやシラーの文学、そして「3B」に加えハイドン、モーツァルトによるクラシック音楽のお蔭でようやく文化国家の仲間入りを果たした。しかし、現在でもクラシック音楽用語はイタリア語、オペラのアリアもイタリア語であり、さらにファッションもパリやミラノから発信されている。

ワールドカップ2014年、ドイツは準々決勝でフランス、準決勝はブラジル、そして、決勝でアルゼンチンを撃破し優勝した。ゲルマン民族がラテン民族を連破し、24年ぶりに世界に冠たるサッカー王国となった。ブラジルで観戦していたメルケル首相はダイエットにも成功し、若干細くなった巨体を震わせて大喜びだった。

(2014-9-26)

作文の履歴

高松 良晴

(1) 3年日記

9月13日から、また、新しい日記帳がはじまった。3年日記の12冊目のスタート、日記をつけ始めてから34年目になる。

中学生だった娘の誕生日に、家族4人で新潟市繁華街古町の文房具店で日記帳を買った、その日がスタートだった。通常、多くの日記帳は1月1日から、順次、日付が印刷されている。しかし、新潟で買ったのには、日付欄は白紙で、何時からでも書き始められ、1ページ3段に3年分、A5版の小ぶりな日記帳だった。

どのみち長続き出来そうもない、と思いましたが、でも、1日分が数行だけ、備忘録代わりに、日々の記録を箇条書きするだけなら、続くかも、と書き出した。ずぼらな身、毎日、毎日、きちんと書けるわけでもなく、時には4~5日分まとめて思い出しながら、日付順に、行動記録を、乱筆で書きなぐってきた。数週間続くかな、が、半年となり、次に2年目に入り、さらに3年目の9月12日まで辿り着くと、もう1冊書こうとなった。それからは、何時も鞆の中には日記帳を入れての日々となり、いささか、書くことが目的化したきらいもあったが、12冊目となった。

自分自身、どうして、日記を書くようになったのかな、と考える。

我が青春時代、おぼえたのは酒と麻雀そして煙草、とても日記を書くなどは、思いもつかぬ日々であった。

就職して2年後、北陸本線黒部川橋梁の架け替え複線化の現場で、南方戦線から復員した苦労人だが明るく大らかな上司に、酒の飲み方から工事施工の「いろは」まで、なにからなにまでご指導を頂いた。

「あんた、川の流れも現場も日々変わるんだ！ 良く見て、飯を食うより先に、ちゃんと記録しとけ！ 大学出たとか出ないは関係ない！」

河川敷の工事現場を歩きまわり、日本海岸近くの松林の中の事務所で記録をつけ、寮で大勢と食事をし、煎餅蒲団に寝る日々であった。

その間、小さなノートの数行に、数カ月に1度くらいだったが、日々の感想を数書き留めていた。これが、日記の書き始めだったかな、と思う。だが、書くことは、その時だけで、終わっていた。

(2) 国鉄、常務会資料

本格的に作文作業をしなくなってきたのは、国鉄本社建設局に配属されてからだ。まずは、担当の東海道線増強に伴う国府津電車基地新設の常務会資料の作成であった。

書こうとするも、鉛筆はなかなか進まない。何とか書き上げ、上司の居る課長室に持って行くと、一目見るなり返された。書き直し、相変わらず差し戻し続きだったが、そのうち、「君が今言った通りのことを、そのまま文章にすれば良いんだよ」との言葉が返って来るようになった。仕上げで自分なりきちんと清書して行ったら、「これで良いけれど、読めるように清書してきなさい」との一言が最後についてきた。

後年、自分自身が、あの上司の立場になってみると、「あの課長は、じっと我慢して、出来の悪い部下をよく指導して下さったな…」との感慨となり、その時になって、初めて、ありがたく思えた。

(3) 国会、想定問答

国鉄から運輸省国有鉄道部に出向したら、国会答弁作成という作文作業が待っていた。ちょうど、国鉄改革法案が衆議院そして参議院と特別委員会で審議が進んでいた。日々、夕方 17 時過ぎる頃から翌日の委員会の質問が次々と飛び込んでくる。国有鉄道部だけでも 120 問程度、直接担当の新幹線・在来線の整備関連でも 10 数問はあった。

答弁要旨を縦書きに数行書き、上司の部長、総括審議官の点検、修正加筆を受け、大蔵省主計局の運輸省担当主査との協議となる。少しでも踏み込んだ書き方をすると、必ずここで引っかかる。総理大臣答弁ともなると、それに内閣官房の政策調整室との協議が加わる。

どうしても、深夜までの作業となり、翌朝 7 時頃から委員会開始の 9 時前までには国会議事堂内の連絡室での大臣レクチャーを終えねばならない。その後、我々作業部隊は、当該質疑の間は、関連資料の束を持って、委員会室の模様を扉越しに見ながら、立ちん坊の待機が続く。

国会答弁というと、定型のお決まりの答弁と思われがちであるが、その短い文章の中に、微妙な言い回しが入っている。

例えば、国鉄再建監理委員会の凍結宣言により中断されていた、東北新幹線東京・上野間の建設再開の動きの答弁が思いだされる。

当初は、「投資の回収という視点から工事抑制の措置はやむを得ざるもの」とはっきりだった。次は、「新しい経営形態のあり方と関連して、今後十分検討して行きたい」と将来に含みを残すようになった。

国鉄改革法が成立する頃になると「東日本旅客鉄道の意見を聴いたうえで工事を行う」と、凍結解除、工事再開の方向となってきた。

これは、答弁原案をはっきり削り、いたって簡単な言葉で、大きな政策変更を数行の答弁要旨に書き上げられた、総括審議官の状況判断と作文能力のお蔭であった。国会答弁でよく使われる「適時、適切に対処する」、そのものであった。

(4) 作文教室

還暦を過ぎた頃、カミさんが、東京新聞主催の作文教室を申し込んでくれた。毎月1回、与えられた表題で、原稿用紙2枚 800字の作文を書き送り添削批評を受けるものであった。そろそろ鉄道の現場を去るのも近くなり、「いつか、生きてきた証に、自分史を」との思いもあり、毎回の表題の中で、我が身の体験・思いを一つひとつ書くこととした。講師からの返信には、赤字添削とともに、いつも飄々としたお人柄が伝わって来る温かいコメントがついており、元気づけられた。

「決められ文字数で書き上げるのも、文章修業の一つです」との赤書きのご注意をよく頂いた。なるほど、朝刊各紙一面下のコラム欄には、決まった数行の枠内に、分かりやすく機智に富んだ文章が並んでいる。凄いな、と感心はしたものの、それはそれ、我が身の文章は、いつも、字数はオーバー、内容もマイペースのままであった。

でも、文章は、ただ、長く書けば良い、というものでない、ということをおぼろげながら感じるようにはなっていた。

(5) パソコン書き

我が家のIT（情報）インフラ整備の全ては、カミさんに負っている。

なにしろ、こちらは、用語、仕組み、内容、ほとんど理解不能だ。

ただ、娘が使うワープロから出力されるペーパーを見て驚いた。

なにしろ、和文タイプライターで印字された公式文書と同じ活字の美しさだ。字が下手で金釘流の身には、これはありがたい、使わねばと、早速、四苦八苦しながら、キーボードをたたく練習を始めた。

不器用な身には、とてもブラインドタッチの域には達し得なかった。それでも1本指ながらも文章が出力されてきた。かつて、上司に、「清書して来い」と言われたことが思い出された。

頃合いを見て、カミさんがパソコンを準備してくれた。その頃には、Windowsソフトが開発され、それまで遠い存在だったパソコンが、使い易い身近なものになっていた。

文案がなかなか浮かばず、何度も書き直さねばならず、字も下手な我が身が、なんとか文章が書き続けられたのは、専ら、パソコンのお蔭だった。原稿用紙に直接書くのと異なり、思いつくまま書け、その文章を消したり書き加えたり、切ったり貼ったり、瞬時に、すべて自由自在に変えて、出版物と同じペーパーが目の前に出力されて来る。

国鉄建設局では、和文タイピストが決済書類から公式文書を作成していた。「もうタイプを打ってしまいましたから…」と上司の訂正指示に抵抗したこともあった。今や、どこのオフィスにも、鉛の活字を一つひとつ拾っての和文タイプの姿はない。

さらに、パソコンの良さは、書きながら、インターネット検索が出来るこ

とだ。調べたいこと、参考文献を引出し、文案、数表作成の基礎資料が得られる。それが、拙著「鉄道ルート形成史」出版へとつながった。「やはり、ITインフラの整備は必要だったでしょう」とカミさんに言われる。「ありがとう、そうだね」が実感である。維持費はかかるが、社会インフラの整備は、河川、道路、鉄道だけではない。

(5) 手書き

「美人の顔は冷たい」と言われる。パソコンから印刷された文書は、きれいな活字が整然と並び、美人的な美しさは感じられるが、なにかしら冷たさを感じることもある。一方、下手な字の羅列であっても、手書きの文書には、なにか人の息遣いが感じられる。

一度に沢山書くことは出来ないが、手書きも捨てたものでない。

日記をパソコンで書く気にはならない。3年日記11冊、全て手書きであり、勿論、12冊目も手書きである。自分でも判読し難い筆跡が続くが、それを読み解く中に当時の情景、感情が浮き上がってくる。

特定のおひとりだけとのやりとりでは、印刷された便りではなく、手書きの便りに温かみを感じ、何度も読み返すこととなる。

さりとて、多くの方々向けや、長い原稿を手書きでとはならない。国会答弁ではないが、適時適切に対処するしかない。

まあ、それにしても、よく書くようになったものだ、と思う。就職する前までは、仕事に、人付き合いに、原稿書きに、こんなに作文の日々が来るとは、思いもよらぬことだった。

先日、出版原稿の2冊目、参考文献や体験からの東京都市鉄道の物語を、3年余りかけて、新聞社の編集者にお届けした。相変わらず、色恋も、心の葛藤は描かれていない。次は、人間を書かねばな、と思う。

無職で肩書きの無い身、もし3冊目を出せたら、名刺の肩書きに「作家」と書けるかな、と、大それたことを夢みるようになった。「極楽とんぼ」だなど、自分自身も思う。

そのためには、まず、2冊目を買っていただけるよう、四方八方の知り合いに、せつせと手書きの便りをお送りすることだ。また、友達を失いそうな気もする。でも、人生たった一度、生あればこそ。

すでに毀誉褒貶らち外の身、作文の日々、まだまだ続けて行こうと思っ
ている。やはり、パソコンのインフラ整備は必要である。

2014年(平成26年)9月25日記

日本語で エエやん～

田村 徹

今 ある有名な新聞の中の 800 字程度の記事を読んでいます、その中にカタカナで記された英単語が 8 個もある。

つまり、日本語 100 字当たり到一个の割合で英単語が混じっている。

アクセス、インフラ整備、コミット、リニア新幹線、キャッチフレーズ、マニフェスト、システム、コントラクト等である。

勿論、世の中の国際化が進み外国人労働者が増えているので仕事のやり方、企業の業績報告書、会計監査等が国際基準に適合して行かなければならないことは充分理解できますが、せめて一般新聞には英単語は使っても、難しい漢字にルビを振るように、括弧書きで必ず英単語には日本語訳を付けて欲しいものです。

かく言う僕の英語能力ですが、現役時代、海外と行き来することが多く、後期高齢者ですが、海外で日常生活を送るのにまあ不自由のない英語力程度は備えているつもりです。

現在社会では幼少期から外国人の英語の先生から直接英語を教わる子供たちが沢山居て数十年後には、英単語が入り混じった新聞記事が当たり前になるかもしれません、少なくとも現在、60 歳以上の人達には僕の提案には賛同いただけるのではないかと考えています。

現在わが家では、食卓と居間に電子辞書を置いて、分からない単語が出てきた場合、配偶者と共に正確な意味を確認しています。

余談ながら、この作業は我が家の数少ない知的コミュニケーション！！になっている気がしますが、中には、バーチャル、エンドエンジニア等スペルが難しく辞書をひく際に難儀することも有ります。

特に、最近の政治家は英単語を使い過ぎているのではないのでしょうか？

意地悪い見方をすれば、専門家や政治家は難しそうな英単語を散りばめて、自己の権威を高めたり、国民を煙に巻いているようにも思えます。

もっとお年寄りや英語が苦手な人達に分かる日本語で説明し報告書を作るべきだと思います。

コンピューターの様外国で最初に開発された機械では、英語専門用語が多く出てくるのは止むを得ない部分があると思いますが、今や家庭にも深く入り込んでいるのですから、もっと分かり易い日本語で説明書を書いて欲しいものです。

コンピューターにトラブルが発生し、担当者に電話した時もその指示が英単語交じりで行われるのはある程度止むを得ないのかも知れませんが改善の余地があるのではないのでしょうか。

ソフトウェアの説明書になると現在でも、とても日本語になっていない様

な説明書が添付され、理解に苦しむものもあります。これは中国、韓国等で開発されたものが日本に入ってきている為かも知れません。

これに反して、時代と共に、市民生活に深く浸透していて準日本語として認めてもいいものも沢山あると思っています。

日常生活の場面でも、「AED」の設置場所を示す掲示を良く目にしますが、このAEDの正式名は Automated External Defibrillator 日本語名で「自動体外式除細動器」と言うそうですが、これは準日本語として「AED」の方が良いのかも知れません。

音楽の世界でも、ポップスで日本語と英語の入り混じった名曲が沢山あります、戦後、江利チエミさんが得意とした「テネシーワルツ」飯田久彦氏がヒットさせた「ルイジアナママ」等程よく英語を散りばめた曲が日本人に受け入れられたことを考えれば今まで記述した僕の主張も少し揺らいでしまいません。

下記の写真はインターネットより引用しました



僕は戦争をちょっぴり知っている世代で、アメリカ文化・文明にひたすら憧れて中学生時代に漫画「ブロンディー」を熟読？して何とか自分もアメリカ式の生活をしたいと思って頑張って来た人間ですが歳を重ねるごとにやはり日本人として日本の文化、文明を大切にするには日本語の乱れを防止することが大切であると考えようになりました。

先日、京都の祇園祭りに行き、古い京都の町屋の老舗の旦那さんと思いき白い髭を蓄えた浴衣姿の 70 歳代と思われる方が流暢な英語で外国人観光客に自分ちの先祖代々伝わる家宝について説明しておられる姿を目の当たりにして、これこそが日本人が目指す道だと感じました。

新潟・高校青春記

高橋 育郎

私は新潟市で昭和26年、高校2年生の夏休みから3年生で卒業し、そのあと半年ほど過ごしました。その約2年間の青春の思い出です。

父が国鉄で、このとき本社から新潟へ転勤し、私は新潟市の県立南高校へ転校しました。

高校の2年生ともなると、青春の意気は急速にふくらみ好奇心が高まって、見るもの聞くもの、すべてが新鮮に響いてくるものです。私もまたそれらの寄せてくる空気を五体いっばいに感じとっていました。

新潟へ行く時、この年に運転を始めたばかりの初めての急行越路号に乗れることがうれしくて、列車のことを調べ、高校の人文地理で習った新潟県のことや、上越線沿線の知識を身に付け、車窓から食い入るように風景を眺め、満足感に浸りました。赤城、榛名の眺め。上越国境の清水トンネル。水上の溪谷美。そして越後平野に出たの弥彦山の姿を記憶に刻みこみました。

ところで私は中学1年生になったとき、美術の最初の時間に樹木を一本描くのが課題になって、室外に出て描いていると、回ってきた先生にほめられるという、かつてないことを体験しました。美術部に入部をすすめられて入って以来、高校の最後まで美術部で通しました。一方、音楽は好きでありながら、小学校が国民学校に変わって、「唱歌」は「音楽」になったものの、授業の中で音楽の楽典に関することは、いっさい教えられずにきたのです。そこですっかりコンプレックスに陥っていました。ですから高校一年生の時、音楽部に入った友人から入部をすすめられても、とても叶わぬものと断念してしまいました。ところが音楽への憧れは高まるばかりで、ラジオのクラシックに耳を傾け、解説を聞いて知識の吸収に心を寄せ、ラジオ歌謡など、いい歌を熱心に聞くようになりました。

そうしたなかで新潟へ転校すると、間もなく友人に誘われ関心を持ち始めた演劇部に入部してしまい、音楽部への思いに後ろ髪を引かれる思いでいました。

新潟は11月になると天候は一変し、どんよりとした雪空に覆われるようになります。そして寒さがつのってきます。

そうした或る日、美術部の隣の美術教室を音楽部が臨時の練習で使いました。曲はロシア民謡の「トロイカ」で、後に歌声運動で知られたものとは違う曲ですが、夕方薄暗くなった空からは雪が舞い始め、歌の情景に合っ、美術部室にいた私の心はゆさぶられました。矢も盾もたまらなくなった私は、仲良しになった音楽部のD君に話して、翌日には入部しました。

した。

年が明けると間もなくD君から情報もたらされました。5月に恒例の新潟市学生音楽祭が開催されるというのです。第5回目になりますが、男子校であった当校はこれ参加していませんでした。だが今年は女子も入ったことで参加しようということになりました。曲目が決まって、練習初日を迎えました。指揮者の姿が見えません。どうしたのか心配していると用務員が来て、実はM君は結核にかかり、長期欠席するということが告げられ、この日の練習は一端中止として次回までに、対策を考えようということになりました。

そして、その日が来ました。しかし名案は浮かばず思案投げ首です。私は新米ですから後方に控えていました。誰かが「このままでは、辞めざるをえないな」といったのです。それを聞いた瞬間、私は身を乗り出して「私にやらせてください」と叫んでしまいました。

室内に衝撃が走りました。その時「君はきのうまで絵ばかり描いていたではないか。指揮がどんなものか分かっているのか」と質問がとんできました。私はすぐに「3拍子はこうで、4拍子はこうでしょう」とジェスチャーで返しました。一瞬あっけにとられた皆は、「それだけ知っていればいいか」と、あっさり承諾したのです。こんどはこちらが驚く番です。これは国民学校6年生の時、先生が黒板に書いて教えてくれたものを記憶にとどめていたものでした。

話が決まると全身に戦慄が走りました。担任の先生が心配して、友人の先生を連れてきてテストをしました。その結果、特訓が必要と、ピアノの前に立たされ特訓を受けたのです。そのうえ親切にも曲目の「川」の模範レコードを渡され、これを聞いて練習しなさいと下されたのです。

この頃、クラシックの名画「カーネギーホール」が町の映画館で上映されました。そこにはワルターなどの名指揮者が登場し、私はそこに映る名指揮者の指揮ぶりを熱心に観ました。初めて知ったその指揮ぶりを、よせばいいのに練習で真似してしまい、大いに笑いかけたのは、楽しい思い出です。

そして、5月の半ばの当日、会場の新潟市公会堂は、信濃川を背にして輝いて、私の青春の血潮も最高潮に湧きかえっていました。ステージでは混声合唱の「希望の道」と「川」がハーモニーして、私はこの2曲を振り切ったのです。うれしかったのは、この春卒業して大学へ進学した2人の先輩が熱狂的に応援してくれたことです。終わった後の反省会では、誰かが「高橋君は、これからどこかでやるだろうな」と、予言じみたことを言いました。果たしてどうか、漠然たるものでしたが、それから2年後には国鉄合唱団に入団の夢を果たし、ここでタクトを振らせてもらえ、それから30数年後には、日本橋で歌の会をはじめることができたほか、習志野市でも合唱団を始

めるなど、あのときの予言がほんものになって、新潟でのあの蛮勇にも似た
勇気が、今日の土台になったのかと、つくづく思い感無量に打たれるのです。
そして信濃川の洋々たる流れを歌ったかのような千家元麿作詞、橋本国彦作
曲の「川」は、私の人生そのものを歌っているかのように思えるのです。

(以上)



離す、放す、話す

高松 泰代

気が付くと、飛行場にいた一という気がする。二十歳の夏のこと。当時は羽田空港。父が見送りにきていたのが、これからの旅が特別のことだという実感となった。

女性が大学に行くことはないだろう’ という言葉が父の口からでたとき、ほっとした。しかし母の意志は強く、高校三年の冬には、大学入試の書類はすべて提出されており受験生として試験日まで残り少ない日々はまことに途方にくれたものだった。母と弟が帰ってきて‘名前あった’と聞いたときの思いは、‘あら、宝くじあたった。’今でも日本一と信じるキャンパスと校舎の美しさと豊かさに通う喜びのすぐ後、また授業があり勉強というものが続くという現実、せっかくのスペイン風の建物は色あせてしまった。

しかし大学というところであるからには、なにか違うことがあるだろうと思っていると、これまで聞いたこともない授業のリスト。いささか気を取り直し、気に入っている建物の部屋にはいり大学の授業が始まった。が、授業をうける度に心はしぼんでいった。一年の間は山の中にあるキャンパスを歩き回るだけが嬉しく、通いクラスにも出席してみたけれど、受ける授業は高校のときに持った罪悪感にさえ至らない思考を要しないものとしか思えなかった。二年生になり、英文科の学生となったのだけれど、英語で文学？ 当時、理数・ビジネス・社会・歴史には興味があったけれど、およそ文学は自分とはご縁がないものだったところに、日本において英語で文学？ 直観的にも生理的にも‘これは、矛盾であり不可能’だとしか思えなかった。予想どおり、英文学の講義は‘英語の文学書をすこしずつ、訳していく’米文学は米国文学の歴史以上のものではない。‘なにゆえに貴重な時間をさいて講義にでなければならぬのか、自分でテキストを参考に文献を読み、思考に多くの時間を費やすべきだ’と判断し、通学を極力少なくすることに決めた。母は私の成績にはもう関心をもたなくなっていたのが幸いだった。一人でいることで十分に忙しく又幸せであったけれど、心優しい同窓生が声をかけ近づき友達としてつきあってくれた。ただ私は自分が‘話していた’という記憶がまったく無い。

羽田空港から飛行機に乗り、サンフランシスコへ。今でもはっきり目に浮かぶ。’アメリカに着く！’という声。窓から明け方の太陽が次第に下界を明るくし、街が見えてきた。そのとき、突然’離れた、放たれた’という突きとおすような感覚を今も覚えている。新天地—自分の世界に降りようとして

いる。それまで見ていなかった飛行機にいる仲間に気が付いた。
今も幸運に感謝している。サンフランシスコでの宿泊は二人一部屋。同室になった人が、以降私にとって社会へ歩いていく道しるべとなってくれている。ともに生活し、話す日々、彼女の非常に真摯な思いを重くなく軽やかに楽しく話す様子は親しく温かく、私には奇跡の人のように思えた。同じ二十歳でも彼女は、'自分で考え、工夫し、行動へ移す'すでに成熟した大人の女性であったのだと思う。第二人で女姉妹というものを知らなかったから、6人姉妹の末っ子という彼女のもつ'人との距離感'は絶妙だと次第にわかってきた。プライバシーを打ち分けながらも、決して人を立ち入るところにはいかない。一言でいえば、彼女のおかげで'社会に、人間社会に出ることが私にもできるのかもしれない'と、心が放たれていったのを今も思い出す。

サンフランシスコからシカゴまで三日半のバスの旅。アメリカ人の友人はみな驚くが、アメリカがどれほどの大きさの国であるのかを肌で知りました。当時国外に持ち出せるのは500ドル。レートが1ドル400円強の時代。大人である彼女からの提案を10人のグループ仲間はすぐに賛同しました。'バスタップで毎回食事をするのはもったいない。スーパーにいった材料を買って、自分たちで簡単なものを作りましょう！'のおかげでスーパーというところにも行き、巨大なスイカやキュウリをみました。シカゴに近づくと緑が多くなり、到着後はシカゴからまた1時間ほど先の住宅地へ。ホームステイということだったので、各自別々のお宅へ住むことになりました。非常に幸運だったのは、彼女の泊まった家が隣だったのです。といっても一軒一軒が広いので、歩いていった覚えがありません。

ある日、彼女の提案で'日本料理を二家族にご馳走しましょう'お料理したこともない私ですが、彼女がきっと全部やってくれと身勝手に思い実行の運びとなりました。天ぷらを中心としたお料理だったようですが、結局彼女が全部してくれたのでしょう。今思えば、よく怒らないでなされたと思うのです。私はその彼女に感謝の言葉さえ言わなかった気がします。

シカゴの一か月が終わるとペンシルベニアの郊外の小さい大学に二週間宿舎生活。ここでも着物をきて日本文化紹介などをしたような記憶がありますが、彼女が大変美しく着物を着ていたので'さすが'と誇らしく思いました。その頃になると、自分の中での変化は自覚できるほどになり'自分から話している'自分によく驚きました。外国語と同じように、日本語での会話を彼女を真似て覚え使っていたのでしょう。プロの会話の先生がいたのですから、試すごとに成功していけばもう'無口'ではなくなっていたのだと思うのです。

最終地ニューヨークは、彼女と同室で毎日一緒でしたから今も一番楽しい思い出の地です。当時は夜でも街に出かけることができました。そうそうオシャレというのも彼女に教えてもらいました。服を借りて、これまでと違う自分になれることも知りました。雰囲気フランスの女優に似ている彼女はニューヨークの街はよく似合って、なんとなくセクシーでおしゃれな彼女がふんわり笑っている姿が忘れられません。

ニューヨークからシカゴを経由しサンフランシスコ、ハワイを通り日本にもどってからそれぞれ日本各地に帰っていきました。三年生の夏が終わり、大学へ帰った私を見て、ある先生が‘変わったねー、人違いかと思った。’ほんの二か月足らずのアメリカの生活でしたが、英語にも影響したのでしょうか。秋の大学間英会話コンテストで優勝、新聞に写真まででると自分の人生にありえないことが起き始めました。相変わらず授業にでるわけではなかったけれど、内へ内へと向かい罪悪感に浸っていることから、外へ向ってもよいだろうと自分の中で折り合いをつけ始めていったのです。それは又親にとっては、娘の遅く来た反抗期であり悩みの始まりでもあったのだと今になってわかってきました。

帰国後もグループの仲間とのリユニオンはしばらく続きました。それぞれの人生をドラマティックに過ごすことになりました。人生の杖である彼女、追いつけることはないと思いながら遠い後ろを歩んでいます。二十歳からのこれまでの長い人生。人にそれぞれ与えられた歩みがあるといわれていますが、その後の彼女の人生は余りにも、忍耐と心の強さを求められるものだと私には思え、できることなら半分にしてくださらないものかーといつも祈ります。ニューヨークでの彼女のあの豊かな笑顔！



’出来たらよかったのに～’と思う大人のつぶやきも時代によって変わってきます。昨今はパソコンー英会話ーでしょうか？ 駅の周囲にみかける〇〇スクールをみると、人気のある習い事がなんであるかがみえてきます。そこで小学生、シニア、女性の人気習い事ランキングをご紹介します。

小学生の「習い事」ランキング(全体・複数回答)

順位	行っている習い事	全体(N=902)	
		人数	%
1	水泳	284	31.5
2	英語・英会話	235	26.1
3	ピアノなど楽器	231	25.6
4	習字	159	17.6
5	サッカー	108	12.0
6	そろばん	100	11.1
7	ダンス・バレエ・体操など	90	10.0
8	野球	49	5.4
9	空手	43	4.8
10	絵画や彫刻	22	2.4
11	剣道	10	1.1
12	囲碁・将棋	9	1.0
13	料理	6	0.7
14	卓球	5	0.6
15	柔道	4	0.4
16	パソコン	3	0.3

2013年3月学研教育総合研究所（学研教育総研）

シニアの習い事ランキング 10位～1位

子育てや仕事もひと段落。今こそ新しい趣味にチャレンジしたい。若いころできなかった習い事にチャレンジしたい

1. **語学**: 外国語を習えば、ツアーに参加しないでも、フリーで旅行できますね。時間の余裕ができた今こそチャレンジしたい。女性はフランス語やイタリア語などヨーロッパ系、男性には中国語などアジア系言語が人気という特徴が。そして英語は男女問わず人気。
2. **楽器**: オカリナや横笛など、「えっ? そんな楽器、習えるの?」というような、意外な楽器にシニアは注目。人とひと味違う、というのも人気のポイントとなっています。
3. **料理・飲み物**: 料理教室は老若男女問わずブーム! そば打ちなど趣味的なものより、日常のお惣菜が作れるようになる教室のほうが人気が高いよう。
4. **カメラ**: プロのカメラマンから習う、機材の使い方と、撮りたいように撮れるコツ。撮影会など、いつもと違うところに出かけられるのも人気の秘訣。
5. **社交ダンス**: 実は、日本の社交ダンス教室の数は、世界でもトップクラスなのだそう。素敵なパートナーとの出会いも楽しみ。
6. **スポーツジム**: 「ジム友」という言葉もあるくらい、スポーツジムは大人気! シニアの体に負担をかけないプログラムも盛んです。
7. **文化教養・市民講座**: 俳句や短歌を作ったり、鎌倉や京都といった古都を歴史の勉強を兼ねて散策したり。先生を囲んで知的なサロンを形成している教室も多々。
8. **クラフトワーク**: 折り紙、刺繍、手作りのちりめん小物、編物など、手を動かす習い事は、脳トレーニングとしても人気があります。
9. **パソコン**: 今のパソコンは適当にいじっていても何となく動かせるものですが、基礎からしっかり理解したいという方にはやはり教室がおすすめ。マンツーマンで教えてもらえる教室も多数。
10. **ガーデニング**: 育てたい花木や苗によって土も肥料も違う庭づくりは、実に奥の深い世界。週末農業も人気です。夢の田舎暮らしへの準備を兼ねて習う人も。

魅力的な女性になるための大人の習い事トップ10

1. ダンス
2. ペン習字、習字
3. ヨガ
4. 英会話
5. 楽器

6. 料理 7. ジム 8. 日本文化 9. ネイル 10. 陶芸

将来人気となる習い事は？

いま人気の習い事は社会を映す鏡。では 21 世紀に来る習い事は？ 人よりひと足早く始めてみると、何かが見えてくるかもしれません。

■1 人の心を癒す仕事につながる習い事

トラウマ、ペットロス、PTSDなど、人の心を傷つけてしまうあらゆる事象に立ち向かう、心理カウンセリング系の仕事が注目を集めています。薬や機械では癒せないのが人の心。心理カウンセラーのような資格取得もありますが、心を癒すおしゃべりのテクニックを学べる話し方講座もあります。

■2 ムリせず体をメンテナンスする習い事

運動不足の現代人。運動しなさすぎで疲労感を訴える方も続出中。足裏を揉むだけで疲れが取れるリフレクソロジー、体のバランスを整えるフィットネス体操といった、勝つことが目的のスポーツ系ではない、体のメンテナンスに近い習い事は、これからますます需要がありそう。インストラクターを目指す方も増えそうです。

■3 和の習い事、復活！

着付け教室は今も人気ですが、自分で浴衣などが縫えるようになる和裁、美しい姿勢も身につく習字、みやびな音色が魅力の和楽器、教養系の歌舞伎鑑賞講座など、和系の習い事は、国際人としての日本人を育てるためにも、もっと注目されてもよいかもしれません。

この子はわがままでしょうか？

長阿彌 幹雄

よりよい人間関係をつくるためには、コミュニケーションの活性化を図ることが大切です。今日はコミュニケーションのツボをお話ししましょう。まずコミュニケーションとは何か。簡単にいうと、相手とのやりとりです。何をやり取りするかというと、「意味」をやりとりします。例えば、「明日こういうことをしたい」とか「今こういうことを考えている」とか、です。もう一つ大事なやり取りがあります。それは「気持ち」のやりとりです。これがなかなか難しいんです。



親子関係の悩み、特に思春期のこどもを持つおかあさん方の相談会がありました。その場に初めて参加されたFさんは、中学校一年生の息子さんについて相談されました。Fさんの息子さん、部活動は運動部に所属していて、いつもお腹を空かせて帰ってくるそうです。ある日、おらずに息子さんの大好物の唐揚げを出しました。息子さんは一口食べた瞬間「まずっ！」と言いました。それを聞いて、Fさん、頭にきたんでしょうね。「もう食べんでよか！」と返したんです。Fさん曰く、「こんなわがママが日常茶飯事だから、この息子をどうにか治してほしい」とのことでした。皆さん、この子どもはわがママだと思いませんか？

相談会に参加された12人のうち、「わがママではない」と主張する方が11人、「分からない」という方が1人でした。「正直で素直な子だよ」とか、「これで親子関係が深まりそうじゃない」と、いろんな意見が出ました。そんな中、言わなくてもいいことを言う人っているものですよ。ね。「お腹を空かせて帰ってきた息子さんがまずっ！っていうくらいだから、よっぼどまずかったのよ！」と言う方がいて、Fさんは「私の気持ちを分かってくれないなら帰ります！」とカンカンに怒ってしまいました。そこで私が、参加者のみなさんに「じゃあ、あなたたちのお子さんがこんなふうに『まずっ！』と言ったらどうしますか？」と聞いたら、満場一致で、「ただじゃ済まさない！！！」という結論になりました。他人の家の問題だったら何とでも言えるんですが、自分の家のこととして考えると、誰だってFさんと一緒に怒ってしまうんです。



このケースではコミュニケーションの不整合が起きています。

「まずい」に対して、Fさんは「食べなくてもいい」という返答をしました。味覚の問題なのに、食べることを禁止する返答をした。つまり会話が成り立っていないんです。なぜ、ここまでの不整合が起きるほど、お母さん方は怒ってしまうのでしょうか？ その場で話し合った結果、息子さんがお母さんに感謝していないからだという結論になりました。だから「まずい」なんて言葉が言えるのだと。それを聞いて私は、息子さんになり切ってこう言いました。「お母さん、いつも僕のために料理を作ってくれてありがとう。でも、今日の唐揚げはいかがなもんか」「これなら腹がたちませんか？」と聞いたら「腹はたたないけれど、なんかちょっと…」と皆さんは言われました。だから結局は、息子さんの放った言葉自体が怒りの原因ではないんです。



「わがままでですか」という質問に、「分からない」と答えた一人のお母さん。口数も少ない方なのですが、その時、こんな意見を述べられました。「私はいつも息子から『まずい』って言われているけれど、一度も腹を立てたことはありません。」

「一度もない」と言うものだから、皆さん、大絶賛しました。それから、どうして怒ることがないのかを尋ねてみました。その場にいた全員が、「大学で講義を受けたから」とか、「本をたくさん読んで勉強したから」とか、素晴らしい答えを期待していました。そしたらそのおかあさんは、「私は料理が下手なんです」と言われました。詳しく聞けば、下手というよりも当たりはずれが激しいということでした。おいしかったり、おいしくなかったりするんです。息子さんに「まずい」と言われたら「あ、ハズレた！」と言います。このお母さんが賢いのは、食卓の真ん中にたくさんの調味料を置いているということでした。自分の舌にも自信がないから調味料で何とかしてもらうんです。「なんか甘い」と言われれば塩を渡し、「なんか塩辛い」と言われれば調味料で調整させます。

時には、「これは、誰が食べても『おいしい』というだろう」と自信のある料理を作ることもあります。その料理を出して息子さんが、「まずい」なんて言っても怒りません。「あらっ？ 熱があるっちゃない？ 学校で何かあったと？」と聞くそうです(笑い)。

このお母さんはコミュニケーションをいかようにも広げられるんです。

「おいしい」と言われればもちろん会話が弾みますが、「まずい」と言われても会話が弾みます。そんな親子関係ができています。

「まずい」という三文字の言葉でも、いろんな思いを見て取れるし、コミュニケーションが広がるというわけです。私は「Fさんは料理の腕前はどの程度ですか？」と尋ねたら、「そこそこじゃないかなあ」といわれました。「そ

こそこ」と言う言葉は普通よりもちょっと上手いと思っている人が使う言葉です。「自分の料理はそこそこだ」と思っていたのに、「まずい」という言葉をかけたから、Fさんは激怒したんです。自分の思いや考えを否定されたから怒ってしまったんですね。その気持ちのズレが怒りという感情を導いたんです。ちなみに「Fさん、どうして自分の料理はそこそこだと思うんですか？」と聞いてみました。Fさんは少し考えて、「夫が15年間、文句も言わずに食べているから…」と言われました(笑い)

みやざき中央新聞 9月15日号より

消しゴムで消せない仕事

渡辺 成典

蒸気機関車の機関士になるには、まず整備係という最下級の仕事から始めて、機関助手を経験しなければならない。

私が国鉄に入社した昭和38年頃は、東京オリンピックや新幹線の開業を前にして景気が浮揚し、東洋一と言われた郡山操作場や大越駅に作られた住友セメントの工場などで、乗務員の養成が急がれていた。私はその波に乗ってすんなりと試験に合格し、仙台にある鉄道学園に入学することが出来た。

学園の寮は木造の2階建てで、兵舎のように中廊下を挟んで一室4人の部屋が並んでいた。私の担任となった平井先生は、背丈が六尺(180cm)近い大男で、目がギョロツとして髭の濃い熊のような風貌の人だった。

最初に教え込まれたのは時間の管理だった。「勉強も大事だが、時間に厳しくならなければならない。鉄道員の時計には夜も昼もなく、24時間サイクルで動いている。だからこれからは8時34分とか21時4分と表現し、分単位ではなく秒単位まで刻むこと。寮生活の場も学園で学ぶ時でも、ダラダラやらないように」と厳しく言われた。

同級生は東北各地から集まっていて、“だっちゃ”で終わる仙台弁に“んだっぺ”で応える福島弁、それに津軽弁や南部弁なども飛び交っていた。その頃はまだテレビも普及していず、お国訛りがかなり強かった。

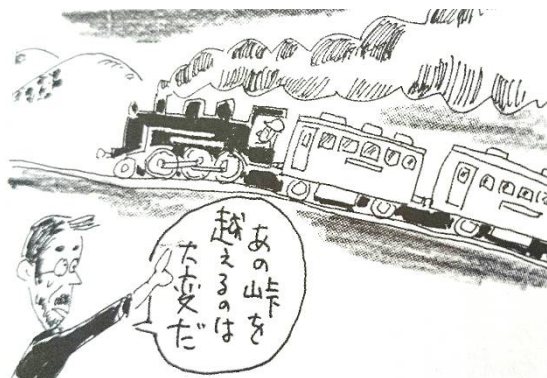
機関士は加速や減速を繰り返して機関車を操り、機関助手は石炭を焚いて高圧蒸気を作るのが主な仕事だ。その他にも、計器類のチェックをする。また、蒸気と水をバランス良く保たないと、急勾配の所では缶水が前に偏って、火床に近い場所に水が無い空焚きの状態になり、臍と呼ばれる鉛が溶解してボイラーが破損してしまう。それを防ぐために給水ポンプを調整して、多からず少なからずという微妙な操作をする。まさに夫婦以上の阿吽の呼吸で、しゅしゅっぽっぽ、しゅしゅっぽっぽと黒煙をあげながら蒸気機関車は走る。

先生は数多くの苦労話や、失敗例を隠さず臨場感に溢れた教え方をしてくれた。「お前たちの技量が未熟で峠をこえられず、立ち往生して救援列車を待つ状態になったらどうなる。後続列車は動けず、多くのお客さんの予定が狂ってしまう。汽車賃を払って乗ってくれている人達は、みんな大事な用事があって利用しているのだ。阿武隈や奥羽の峠を越えられる技術をしっかり磨かないと、泣きを見るのは誰でもない自分自身だってことをわすれちゃなんねー」と。

相撲取りが四股や擦り足を繰り返し、競輪選手がペダルを漕ぎ続けるように、私は模型の火室投炭練習場で石炭炊きの練習を続けた。焚口に見立てた

扉の鎖をひいて開閉し、小スコップに1kgほどの石炭を掬い一瞬の間に扇状に散布していく。一畳半ほどの火室に19分間で600杯投炭する。中腰に屈んだまま。手首を目一杯伸ばす不自然な姿勢で、100杯を過ぎるころから腰が痛くなってくる。秋風が吹き抜けていても作業衣は汗で濡れ、額からもしたたり落ちる。腕が下がると焚口の開閉と呼吸が合わず、スコップが鉄扉にぶつかって石炭が散乱し、時には火室の中にスコップを持っていかれることもある。

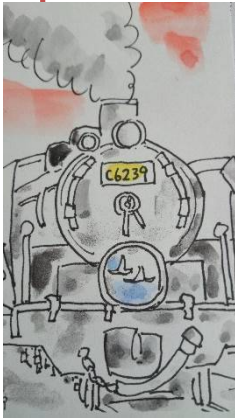
[何やってんだ。スコップが無いと汽車が走れねーじゃねーか]と叱咤が飛ぶ。腕はパンパンに腫れ、手の皮が破れて血がにじむ。その繰り返しで固い皮膚になるにつれ、石炭は薄く広く扇状に散布されるようになる。



学科の授業は疲れから居眠りする生徒もいた。先生は大きな声で注意することもなく、事故や間違った対応でパニックになった運転室の動きを、身振り手振りを交えて語りながら、自分をその場に重ねてみろと言った。それは、事故を起こしてからあの時こうすれば良かったと、消しゴムで消せるような仕事ではないこと。人命を預かる責任の重さを教えていた。

閉じかけた瞼が開き、必要な知識を会得しなければ現場には出られないという思いが、睡魔を追い払っていた。

筆者よりいただいたお葉書をご紹介します



時代の進歩はたしかにS Lのように激しい労働とプロとしての技量を培うために努力を重ねてきましたことがなくなりました。スイッチ一つで何も考えないで出来る生活ぶり。便利にはなっただけれど、なぜ?どうしてとか、途中のプロセスが一切省略されてしまいました。二宮尊徳のように薪を背負って本を!という幼い頃がとても懐かしく思うのです。

余市：小樽からオプションツアー

藤原 昌子

昨夏、小樽に行ったがその折余市へのオプションツアーに参加した。バスで小樽から40分か50分ぐらい、車中から時々見える海や町のたたずまいを眺めているとやがて到着。石造りのアーチの入り口を見上げてちょっとヨーロッパ風なのにわくわく感が広がる。前庭から見渡せる建物群が赤い屋根でこれまたシャレている。

その赤い屋根のいくつかの工場は広い通路の左右に分かれて建てられているが、そこを案内されウイスキーが造られていく過程を知る。

今では世界でここだけという、伝統的な石炭直火焚きでアルコールを蒸留しているという蒸留棟のポットの上部に幣が巻かれているのが日本的である。



この蒸留棟に入る手前にもと事務所として使われていたこじんまりとした建物があり中には応接セットなどなどが整えられていた。これは屋根がグリーンで鮮やかである。

更に進んでいくとやはりグリーンの屋根のキュートな建物が見えてきた。周りに白樺の木が植えられこの時ギボシが花盛りであった。いずれも本州と違い緑がたおやかである。大きな石灯籠も備えられている。何の気なしに入り口を見ると RITA HOUSE と書かれている。さてこれはどういう意味かなと思ったものの聞く人もおらずそのままになり最近朝の連続テレビ小説に取り上げられることになって氷解した。



この赤い屋根、緑の屋根の建物9棟が2005年に国の登録有形文化財建造物に指定されている。

さらに進みウイスキー博物館の中に入ると暗い中ステンドグラスの King of Blenders というあのキャラクターが迎えてくれる。ブレンドの名人でいくつものウイスキーの香りを利き分けられた人だという。最近、暗いところは足元が不安で落ち着かず早々と外に出て明るさにほっとする。



最後は試飲もできる広く趣きのある休憩所でひとやすみである。二階にあるのだが周りはガラス張りで眺望がすばらしい。はるかに山なみが望まれ近くはシラカバなどの木々で埋め尽くされ、七月末の北海道のこと緑も吹く風もとても優しくやわらかである。見渡す限り自然のみで人工的なものは目にはいない。これは確かにスコットランドによく似ている。夫の夢を大切に遠く日本に来たりタ夫人も慰められたことと思う。



サウディアラビア訪問記（4）

藤井 能成

1度目と2度目のサウディ訪問ではジェッダを訪れる機会があった。ジェッダ訪問の目的は日本の技術で稼働している大規模な逆浸透法海水淡水化プラント（RO 法海淡設備）を見学することであった。しかし、最初の訪問時にはRO 法海淡設備の見学申込みの許可が間に合わず、その代わりに工業都市ヤンブーの石油化学工場の見学に予定が変更されていた。

リヤドからジェッダに飛び立つ時の印象はやはりこの国独特のものではないかと感じた。一つはリヤド空港の搭乗手続きの検査である。時計やキーホルダー、小銭入れ等の金属類全てを除いても、さらにメガネをとり、ベルトを外し、靴を脱いでも、X線検査装置の警告音は鳴り止まなかった。もう一つは、リヤド空港の出発ロビー（写真①）の中に礼拝用の広いスペースと手洗い室があり、礼拝の時間になると手洗い室の床は水浸しになってしまい、清掃員が慌ただしく床の水を拭いていた。ヤンブーから戻る時に、若い男性が空港の階段状の小さな待合室の片隅にお祈り用の絨毯をひろげて礼拝をしていた姿と対比して印象に残る光景であった。



リヤド空港待合室

また、飛行機に乗り込み座席を探そうとしていたところ、スチュワーデスが搭乗券の座席番号と関係なく席を指定していた。よく見ていると女性を窓側の席に先に座らせ、残りの席に男性客の席を割り振っていた。幼い子供連れの夫婦の場合は女性が窓側に、男性が子供を抱いて通路側の席に座った。離陸後観察して分かったのは、機内で飲み物や食べ物が出された時に、女性は頭覆いの布（ムダツワラ）で顔も隠しているため、顔に巻きつけている布の一端を外さなければ飲むことも食べることもできない。そこで、他人に顔を見られないよう女性客には窓側の席が優先的に与えられたのであった。

さらに、ジェッダ空港に着いた時にモービル・ラウンジという飛行機の乗降装置を初めて経験した。大型バスのような乗り物で、バスと異なるのは客室の部分が巨大なジャッキのような昇降装置で上下する。飛行機から降りる乗客は飛行機の高さまで持ち上げられた客室部分に、開け放たれた前面から乗り降り、客室を下げてから自走してターミナルビルまで運ばれる。一度に4・50人以上乗れたように思う。

いまやムスリムは全世界で12億人以上とされている。体力と財力のあるムスリムは一生に一度はメッカへ巡礼することが義務づけられている。巡礼

でメッカの玄関口ジェッダを訪れるムスリムは 200 万人くらい、そのうち外国からの巡礼者は 100~120 万人と言われている。サウディ国内の巡礼者もその殆どが航空機を利用するであろう。巡礼月に世界各地からジェッダ空港に集中する人々を手際よく乗降させるにはタラップ式やボーディング・ブリッジ方式ではなく、モービル・ラウンジのような装置が選ばれたのであろう。

夜の 8 時を過ぎて少し疲れを感じた頃、予約していたジェッダのインターコンティネンタル・ホテルに到着した。すぐにロビーの奥のソファに通され、ジュースなどを出してきて丁寧に迎えられた。チェックインの用意をしながら待っていると、支配人と思しき人物が出て来て“予約はキャンセルされた”、“プリンスが泊りに来ているので一般客を泊めることができない”、と。一行が顔を見合せていると、“代わりにレッド・シー・パレス・ホテルをとったのでそこへ案内しよう”と言う。やむなく車で 10 分ほどのレッド・シー・パレス・ホテルに移動することになった。ホテルは少し古びていてインターコンティネンタル・ホテルと比較すべくもないが、旧市街の直ぐ近くにありジェッダの街歩きには格好の位置にあった。

翌日は早朝、ヤンブーに飛び (②)、ロイヤル・コミッションを訪問してヤンブーの工業都市建設の経緯の説明を受けて、石油化学工場を見学した。

ヤンブーはジェッダの北 350 km、メディナの西 160 km、紀元前からイエーメンやエジプトと地中海世界とを結ぶ香料等の中継貿易の港であった。ヤンブーのロイヤル・コミッションの説明では、アラビア半島東側の油田地帯から原油をパイプラインで紅海側まで輸送し、石油製品や石化製品に加工してヨーロッパに輸出するために建設された工業都市である。年間の風向などの気象データを調べ、重工業や軽工業、電力や水道設備、学校・理工系短大等の公共施設、及び居住区域などの配置を数年かけて検討したという。

広大な工場内 (③) をマイクロバスで案内された後、事務所で製造部長と事務部長の説明を聞いた。巨漢の製造部長は日本で実習教育を受けたことがある技術者で、大変懐かしがっていた。実習中、部屋が狭くて寝る時に足先が部屋の外に出してしまうので困ったが、実習先の会社の人達が食事等にしばしば誘ってくれ、米国のように差別され



空港からヤンブー市内へ



ヤンブーの石化工場

ることなく大変親切にしてくれた、と思い出しながら話してくれた。米国では机上の勉強と現場実習が別々だが、日本では両方同時に学べて現場作業も覚えられるので、日本の教え方の方がいいとも言っていた。

事務所ロビーには社宅の模型が展示されていた。部長級の社宅は4人の妻を持つことができる部屋割であった。事務部長には複数の奥さんがいるが、製造部長は一人で十分だ、何人も貰うと大変だ、と笑っていた。

空港からヤンブーの市内に入る辺りにアメリカ人と韓国人の居住区があった。それぞれ建設に関わった人達がまだ住んでいたのであろう。空港ロビーのカウンターには Spring Roll なるものが置いてあった。試食してみたら見かけよりかなり良い味で、ビールがあったらなお良いのにといいながらペプシコーラで我慢した。

ヤンブーからは比較的早く戻れたので、夕方雑貨店や菓子店などが集まったショッピング・センターやゴールドスークを見て回った。写真を撮る機会はありませんでしたが、フィルムを補充するためカメラ店を探してコダック・フィルムを買った。土産にデーツや菓子を買って(④)小銭を使ってしまっていたので、米ドル紙幣しか持ち合わせが無く両替に困っていると、近くで見っていた若者が「○×△\$¥・・・」と言って私のお札を持って飛び出して行った。あっけにとられて見送っていると間もなく戻って来て、レート計算通りのリアル紙幣とコインを返してくれた。見も知らぬ不案内な外国人に対してそのまま消えてしまってもどうすることも出来ないのに、よその国では考えられない出来ごとであった。



ジェッダのお菓子屋



ジェッダの金細工店

日没の礼拝の時間が近付くと商談中の客も店の外に出し、すべての店が扉を閉めてしまう。そこで一旦ホテルに帰り、お祈りが終わる頃再び金細工・宝石店の並ぶ通りに戻って覗いてみた。3・4軒見て回ったところで、英語が達者な兄弟がやっている店を見つけた(⑤)。ネックレスやイヤリングなどを見ていると普通のコーヒーを出してくれて、色々と話しかけて来た。値段の違いなどを聞いているうちに我々が日本から来たとなると、非常に気の毒そうな表情をして、“Quake! Quake は大丈夫か?”という。我々は地震の翌日発ったので災害の規模はまだ分からない、神戸から50km位離れた所に住ん

でいるが特に被害は無かったと話す、神戸の崩壊した高速道路の写真を一面に大きく印刷したアラビア語の新聞を取り出して来て見せてくれた。今や大地震のニュースは1週間もしないうちに砂漠の果ての国にも伝わり、心配してくれる人達がいることを知った。

次の日、サウディアラビアを発つ便は午後なので、昼まで自由な時間があった。先輩になる微生物学の先生にその店の話をした所、行って見ようという。先生が奥さんへの土産に豪華なネックレスを選んで値段交渉をしていたので、私は傍でほかの金細工製品を見ていた。すると突然、先生の相手をして店の人、「今、自分は“○△ドル”と言ったか？」と私に向かって聞いて来た。どうしてかと思っていると先生は「最初は△○ドルと聞いてから交渉を始めたところ、今○△ドルでいいと言った、君も聞いていただろう？」と言うのである。確かに“○△”と耳に残っていたのでそう返事すると、店の人は「自分は△○ドルと言っていたつもりだが、それなら仕方ない、○△ドルでいい」とあっさり認めてしまった。かなりの値引きであった。ジェッダの人達は親切で正直で嘘がつけない人達なのかもしれない。旧市街の建物の窓にはこの地方独特の木製の出窓が取り付けられていて、趣のある景観は朝や夕方の光で表情が変わる(⑥)。



あるいは白い建物に淡青色に塗った出窓を取り付けた家屋は薄緑色の街路樹と乾いた空気に映えて一層澄んだ空色に見える(⑦)。旧市街のゴールドスークの通りに立ち並ぶ店々の窓枠や扉は濃い緑色に塗られ、金色に輝く店内の雰囲気によく調和している。美しい街であると思った。しかし、紅海から深く入り込んだ湾のさらに奥の入り江のくびれた部分にあるレッド・シー・パレス・ホテルの辺りは、最近湾内の水が汚染されて夏は不快な臭いが漂うようになったという。



大震災から 4 年目、復興の現場で今何が

～住まいをめぐる問題点を中心に～

渡辺 陽一

東日本大震災から間もなく 3 年半、復興への道のりは遠い。特に、住宅問題の解決なくして個人の復興はあり得ないが、この住まいの再建に時間を要している。

人手・資材不足、資材価格・労務費の高騰は震災直後から懸念されていたが、その遅延要因が深刻化している。これから住宅建設がピークを迎えようとしている中、好転する要因は見当たらない。加えて、消費税増税に伴う駆け込み需要、20 年の東京オリンピック開催に向けた建設ラッシュ、老朽化したトンネル・橋梁・道路といったインフラの総点検など、被災地に集中投下されるはずだった人と資材は分散し多くは首都圏へ向かった。

3 年の時はあまりにも長く、震災当時の中学 3 年生は今春高校を卒業し多くは沿岸部の被災地を離れている。被災者の経済力、家族構成、生活環境を大きく変えており、これが復興まちづくりにも大きな影響を与えている。

一方、この春以降、「町で初の災害公営住宅完成（女川町）」、「大規模集団移転先で県内初の自宅再建（岩沼市）」、「市内 51 カ所の集団移転先のうち初の団地造成完成（石巻市）」など、ようやく住まい再建始動の明るい話題も聞かれるようになった。しかし、政令指定都市として事業推進力のある仙台市などごく一部を除くと暮らしと地域の再生はまだまだこれからである。3 年前、2、3 年我慢すれば「住まい」と「働く場」を取り戻せるとの思いであったはずが、住まいの再建となりわいの再生は長期的に遅れ、地域によってスピード感に差が生じ、時間のかかる所、自立困難な被災者が増える傾向にある。

仮設暮らしの長期化が避けられない情勢にある中、公的住宅の整備においても時間が経つにつれて需要が大きく変動し、集団移転や区画整理事業による現地再建からの離脱者が出始め、反して自力再建が困難な被災者向け災害公営住宅入居希望者が増える傾向にあり、計画に狂いが生じてきている。沿岸部はもともと過疎化、高齢化、人口減少が進んでいたが、経済力の低下など環境の変化に加え、移転先の利便性欠如、コミュニティーの寸断、仕事を求め若い世代を中心にした仙台都市圏への人口流失などが大きな要因と言える。

震災来定期的に定点観測を行っている、岩沼市、名取市閑上地区、石巻市中心部をはじめとする沿岸部被災地の復興現場で今何が起きているのか、住まいをめぐる問題点などをいくつか拾ってみたい。数値は基本的に 6 月末現在である。

* 公的住宅整備計画に並び、復興住宅計画の見直しも

県内の公的住宅整備状況は次の通り。

- ・ 防災集団移転促進事業： 195 地区
うち住宅等の建築が可能となった地区 29 地区
- ・ 土地区画整理事業： 34 地区
うち工事を着工した地区 12 地区
住宅等建築可能地区 0 地区
- ・ 災害公営住宅整備計画： 内陸市町を含め 21 市町 15,658 戸
うち完成 10 市町 1,361 戸 (8.7%)

希望戸数（需要）の変化

- ・ 防災集団移転： 希望戸数 13,551 戸 → 減少傾向
- ・ 土地区画整理： 希望戸数 11,054 戸 → 大きく減少傾向
- ・ 災害公営住宅： 地域によって希望増加の動き顕著
(民間住宅活用等で対応の方針)

公的住宅の整備は見ての通りの進み具合である。

公的住宅の整備は被災者の意向調査で整備計画が決められたはずであるが、時間が経つにつれて需要が大きく変動し、沿岸部各地で防災集団移転促進事業と土地区画整理事業による住まい再建から離脱が続出し、完成しても空き地が出かねない自治体や計画見直しを余儀なくされる自治体の報道がこのところ相次ぐ。中でも、土地区画整理事業は同じ浸水地を県道などのかさ上げで住宅建築が禁止される災害危険区域と線引き区分けし、土盛りかさ上げにより住宅用地を造り直し現地再建を目指す地域が大半で時間がかかる。定点観測を行っている石巻市中心部新門脇地区(24 区)もその1つ。津波対策である県道かさ上げと区画整理事業の完成は早くて平成30年度末とのこと。住まいの着工にはあと5年待たなければならず、地権者の6割が市に対して用地の売却を申し入れ、当該地での自力再建断念意向を表明している。

公的住宅整備計画からの離脱者の多くは、進まない現状に焦りと諦めから他所で自力再建(借上げを含め)を目指す者と、経済力、家族構成、生活環境の変化からやむなく自力再建を断念して災害公営住宅入居へ希望変える者に分けられるが、まさに失われた3年の時の長さを感じないではられない。自力再建断念の動きは沿岸部だけではない。先般、仙台市が市内の仮設暮らし1万世帯(うち $\frac{1}{3}$ は市外からの避難者)に聞き取り調査したところ、35%が自力再建困難、そのうち大半の30%が資金難、安定した働き場がないことを理由にあげており、政令指定都市として独自の手厚い支援策を講じている仙台市でさえこの様である。ましてもともと働く場に恵まれず自主財源に乏しい沿岸部においてはなおのことである。

一方、時間の経過とともに各地で災害公営住宅への入居希望が増えており、女川町、南三陸町、石巻市、仙台市などでは増加修正を行った。戸数が最も

多い県内第2の水産都市石巻市は3,250戸から4,000戸へ計画変更を行ったが、最近の調査では市全体の入居希望者は5,000戸を超え、加えて入札不調や高台移転工事に人手をとられている影響で本年度末までの完成も1,220戸程度にとどまる見通しにあるため、民間からの買取り型や民間賃貸住宅を活用する「みなし災害公営住宅」の導入などの検討に入っている。ただし、石巻市の場合このまま行くと市内世帯の1割が災害公営住宅になる。しかも、入居者の高齢化率が35%と高く、災害公営住宅として管理する20年間（神戸市の例）のうちに空き家になる可能性も指摘されている。建設費は復興予算で賄われるが維持管理は自治体の負担であり、市は今から頭を悩ませているところである。

この春から、大規模集団移転で県内のトップランナーとなった岩沼市玉浦西地区をはじめ県内20数地区の新たに造成された高台・内陸部で住宅建設・入居が始まっている。しかし、計画通り造成整備したが計画離脱で空き地が出たり、当初希望に沿って既に造成に着手したものの離脱者が相次ぐ恐れが出てきて、その扱いに苦慮している自治体が多い。本来、防災集団移転促進事業は災害危険区域に指定され移転を余儀なくされた被災者だけを対象にした制度であるが、最大で募集区画の約4割に空きが生じると伝えられている山元町では苦肉の策として、国の交付金返還覚悟で災害危険区域指定から外れた浸水地被災者や他所からの受け入れも認めることにしており、国も最近になって定住人口の維持を名目に例外的に追認する方針を打ち出した。今後空き地の出そうな他の自治体もこれに倣うことになるだろう。

災害公営住宅も県内で約9%が完成、入居が始まっている。災害公営住宅は完成のかなり前に入居者募集を行うが、この段階では大概建設戸数を上回り抽選を行う。しかし、沿岸部にあっては完成してみると買い物、通院などの利便性を理由に様子見に転じ空き家の目立つ所も出ている。震災後仕事をなくした働き手を仙台都市圏に出しながら住まいだけを先に決めることへの躊躇、今後予定されている利便性の良い公営住宅の完成に賭ける（待つ）ケース、事情は様々ながら、苦しい生活の中仮設住宅は家賃負担がないことも大きな要因と言われている。

* プレハブ仮設の独居高齢世帯率 16.4%

県内の応急仮設住宅入居状況は次の通り。

- ・プレハブ仮設住宅： 17,761世帯（40,033人）
- ・民間等賃貸借上住宅： 15,685世帯（38,165人）
- 計 33,446世帯（78,198人）
- ・ピーク時 47,861世帯（123,630人）
- ・他に県外避難者 8,049人

7月末に総務省の住宅・土地統計調査（速報値）で転居世帯数が発表された。

全国の空き家数 820 万戸（空き家率 13.5%）という驚きのデータで話題を呼んだ調査の一つである。これによると宮城県内における東日本大震災による転居世帯数は 7 万 4 千件（県全体世帯数の 7.8%）、このうち 5 万 3 千件は震災により住宅に住めなくなったことによる転居であり、残りは学校や職場が変わったことによる転居と分かった。ピーク時の仮設住宅入居世帯数から見て住宅に住めなくなった被災者の 9 割（県外避難者を入れると推計 95%）が仮設住宅に入居したことになる。

「仮住まい 終の住み家と つゆ知らず」、数か月前に地元紙で見つけた仮設住宅暮らしのお年寄りの川柳である。

上記の入居状況で見る通り、他所に自力で家を再建したり、数はまだ少ないものの復興住宅の完成などにより入居世帯数はピーク時の 7 割まで減少している。しかし、まだまだ多くの被災者が仮設住宅暮らしを余儀されていることに変わりはない。

応急仮設住宅（プレハブ）は災害救助法で原則 2 年の仮住まいを前提としている。そのため建付けや音漏れによるプライバシー問題などが指摘されてきたが、ここに来て高齢者の孤独化 → 孤独死（宮城県警調査 51 人）が大きな社会問題として注目されている。プレハブ住宅の独居高齢世帯率は 16.4% に達している。独居高齢者は今まで築いてきた近隣関係がなくなり、周囲に頼れる人、気にかけてくれる人がいなくなった。さらに介護が必要な高齢者は外出困難が重なり、孤立感を深めている被災者が少なくない。復興まちづくりや住まい再建の遅れから長期入居が避けられない情勢になっている今、プレハブ住宅の劣化対策などには本腰を入れる動きにあるが、住まいと付き合いの変化に心が追いつかず不安を募らせる独居高齢者には十分な手が回らず、仮設暮らしも一つの曲がり角を迎えていると言えよう。

また、今後仮設住宅から新しい住まいへ移るにあたって、特にひとり暮らしの高齢者の環境の変化に対応したケアを含めコミュニティの再生は大きな課題となる。トッランナーとなった岩沼市玉浦西地区のように、まとまった一団の用地（20 ㌔²）に移転元 6 集落のコミュニティ確保に配慮した地区割りを行って一括移転させる大規模な集約移転はごく稀であり、多くは旧集落住民を幾つかの小規模移転先に分散して転居するケースである。より一層のケアが求められるところである。

* 仮設から仮設へ流転

県内の仮設住宅とプレハブ仮設住宅用地の民間等借上げ状況は次の通り。

- ・ 仮設住宅の民間等賃貸借上住宅（みなし仮設）割合： 45%
- ・ プレハブ仮設住宅用地（402 団地）の民間借上・校庭使用の割合： 50%
- ・ プレハブ仮設住宅平均空き室率： 19%

被災地で仮設住宅入居者が別の仮設住宅へ移転を迫られるケースが出てい

る。また、仮設商店街にも同様の動きが見られ動揺が広がっている。民間借上げ用地の契約更新が出来なかったり、学校用地を返還する必要性が出てきたりしたためである。

この6月、名取市が同市最大規模の愛島東部仮設団地の用地（2.5㍍、182戸）について、入居者の強い要請を受ける形で県内初の被災自治体買取りを決めた。仮設住宅撤去後の利用計画は持ち合わせていない。しかし、これは異例の判断であり、他の自治体は維持経費の負担軽減も兼ねて空き部屋の出た団地への集約化によって対処しようとしている。これには転校が伴うことやかかりつけ医院への通院の困難さ、仮設住宅で築いたコミュニティ分断の恐れから反発も強く難航しているのが実情である。

また、一時は多くのボランティアと被災地学習体験視察で賑わった県内49カ所の仮設商店街についても、用地明け渡しや復興まちづくりに向けた旧市街地のかさ上げ工事着手に伴って苦渋の転居を迫られる動きが出始めている。仮設商店街の場合はなりわいの維持のためにも、数年後の本格的なまちづくり参画までのつなぎとしてもう一度他所で仮店舗を設けることが必要であり動揺が走っている。

*** 止まらない人口流失**

昨年も報告したが、沿岸部被災自治体から仙台都市圏への人口流失が止まらない。住民基本台帳ベースで、女川町、県南の山元町は2割以上、南三陸町は2割近く減少。南三陸町は住民票を移さずに内陸部に隣接する登米市などへ移転した町民を入れると35%前後の減少とも言われており、この多くは元に復しても戻らないのではと懸念されている。加えて沿岸部では近い将来高台移転先の限界集落化、災害公営住宅の空き家発生が懸念されており、沿岸部自治体は、災害公営住宅の家賃減免、他所からの転入者住宅取得への補助金、災害危険区域から外れた地域からの災害公営住宅入居、転居費補助など、定住支援と避難住民の帰還にそれぞれ知恵を絞ってはいる。しかし、財政力の違いで自治体の対応に差があり不公平感を助長し住民に戸惑いがあることも事実である。

なお、仙台市は災害公営住宅を積み増して3,200戸を整備する計画にあるが、市内仮設住宅暮らし1万世帯のうち $\frac{1}{3}$ が市外からの避難者であり、しかも3年間暮らししている現状を踏まえ、市は住民票を移せば入居応募を受け付けると表明した。沿岸部自治体の反応は複雑の様である。

*** 「職住分離」のまちづくり、買い物弱者が**

沿岸部の自治体の多くは住まいを高台・内陸部の新たな造成地へ移し、業務・商業施設は津波にのみこまれた旧市街地をかさ上げして集積を図るまちづくりを目指している。創造的復興が声高く叫ばれる中、果たして旧市街地

の復興まちづくり計画がこれからの人口減など深刻な課題を見据え検討がなされたのか、本当に身の丈に合ったものなのか、中にはやや疑念なしとしないものもある。しかし、海に面した平地のすぐ後ろに山が迫る三陸沿岸部などではこの“職住分離”の選択しかないことも事実である。高台・内陸部の集落予定地は旧市街地から遠く離れている所が多い。しかも小規模集落が大半で、当然ながらここに商業店舗を出店しようとする動きはほとんど見られない。完成した災害公営住宅に応募しながらの様子見、当初希望した高台移転断念の所以の一つになっていることは前に触れたところである。独居高齢世帯や車の使えない世帯が買い物難民になることが避けられないうえ、住民の利便性と商店の集客力の双方にマイナスとなる懸念が指摘され、大津波で壊滅し住民の大半が高台に移る南三陸町志津川地区では、高台から低地に人を呼び込むための買い物バスの巡回、巡回配達販売などを模索しているところである。

なお、このような商業集積地の多くは災害危険区域であり住むことは出来ない。店舗とは別に自宅を高台に持つか、他所に用地を求めて自宅兼店舗として再建するか、負担も二重になりかねず悩みは尽きないようである。

* 巨大防潮堤、被災地住民に強い抵抗感

宮城県内では損壊した防潮堤の整備を中心に延べ 240 kmの海岸保全復旧工事を計画している。仙台空港への大津波襲来の映像は記憶に新しいところであろう。何処まで行っても津波から逃れる高台が見当たらない沖積平野の仙台湾南部海岸（仙台湾～福島県境 50 km）においては、防潮堤の整備なくしては何も先に進まず、また、大きな漁港が存在しないこともあり、いち早く高さ 7.2 ㍎の防潮堤が完成した。しかし、想定を越える 10 ㍎、20 ㍎級の大津波が襲い巨大防潮堤建造を計画している県北部の海岸線については、時間が経つにつれ、県や市、町が住民の合意を得られたとしている海岸も入れ見直しを求める住民の声が高まっている。

昨年紹介した水産業と海の景観を売りに海と共存してきた気仙沼湾内地区は、県が譲歩して 4.1 ㍎の防潮堤+1 ㍎の可動式防潮堤で歩み寄った。しかし、住民が高台に移転し 14.7 ㍎の防潮堤が守るのは道路と農地のみとなる気仙沼市小泉地区、海拔 20 ㍎を超える高台移転地区を守る点では役に立つと思えない 9.7 ㍎の防潮堤にこだわる石巻市雄勝湾奥部地区、後に県民の反発を受け土砂流失防止工事に衣替えした塩釜市浦戸諸島 4 つの無人島（震災前から耕作放棄地）など、本来は復興まちづくりの前提となるべき巨大プロジェクトに対し異論が表面化し議論の着地点が見えない地域が少なくない。

国や県の画一的な政策や 2015 年度末までの集中復興期間内の予算執行を求める国の手法、住民合意の形成過程における県の対応に批判が向けられ、各地で頻繁に「巨大防潮堤を考える」シンポジウム、フォーラムが開かれ

ている（5月末には仙台市内で何故か安倍総理夫人が主催者代表として挨拶するフォーラムも開かれた）。

今まで仮設暮らしで分散するなどしてしまい十分議論する余裕もなかったが、3年が経ち冷静に考えられる時期になり、防潮堤のため日常生活やなりわいが不安になることに気付き始めたからとも言えよう。ただし、私も日弁連などの集いでやり取りを聞いてみたが、3年経っても何も変わらない風景が被災者の焦りを生んでいることもあり、復興を実感したいという共通の思いが広まっている中で見直し派と賛成派の議論がなかなかかみ合わなくなっていることも事実である。行政には期限を切らずに十分丁寧に話し合いを重ねることが求められているのではなからうか。

先日、首藤伸夫東北大名誉教授（津波工学）が講演の中で津波対策の基本はと問われ、「防潮堤は減災に役立つことは事実。造るかどうかは地域住民が責任を持って決めることが大切。行政だけで決めれば住民は津波防災や避難の在り方を行政任せにして津波の恐怖を忘れてしまう恐れがある。実際、震災時に万里の長城の異名を持つ巨大防潮堤があった宮古市田老町はじめ岩手県沿岸部では避難が不十分で多くの人が亡くなった。防潮堤を越す津波はいつ来るか分からない。津波対策の基本は“高台に住む”、“地震時は高台に避難する”、“浜辺の建物は浸水を覚悟したものにする”」と語っていた。過度な依存に警鐘を鳴らす重みのある発言である。

* 震災ボランティア、需給ミスマッチが

ボランティアが集わなくなった。震災の風化や資金（新幹線、東北自動車道から離れ交通費、滞在費がかさむ）、人手不足が影響しているのだろう。

4年目に入り被災地のボランティアを取り巻く環境も大きく変化している。ボランティアニーズの変化である。震災発生から暫くは私も少々経験したところであるが、がれき処理、清掃、救援物資の仕分け、写真や回収品の整理といった力仕事中心のボランティアであった。しかし、4年目に入り仮設住宅暮らしの長期化が避けられない情勢となった今は、高齢者の見守り・孤立防止、買い物支援、復興まちづくり支援などコミュニティー重視のボランティアに様変わりした。従って今見かけるのは仮設住宅での高齢者対応などに限られるようになった。講演先などで2～3日震災ボランティアに行きたいが何処で何をと問われることがあるが、このニーズの変化により活動は継続性・専門性が求められるようになってきており、その分活動期間も長期化し費用負担も大きい。従って、活動の主役も個人から専門性を発揮して継続的に支援出来る企業や学校に移りつつあるようだ。

ただし、今後住まいの再建が進むとその状況が一変する可能性がある。引っ越しなどを伴う力仕事が増え震災発生から1年後までのボランティア需要期に続く若者の力を必要とする第2の需要期が必ず到来するであろう。震災

直後のように集結してくれるかどうか不安視する向きもある。高齢の私自身が駆け付けることは到底難しいが、震災を「決して“風化”させない」努力だけは惜しまないようにしたいと思っているところである。

2015年までの集中復興期間内に25兆円を投じる復興事業は、冒頭に述べたように、地域によってスピード感に差が生じているが、各自治体の財政力の違いやそれぞれの事情による対応の差も住民に戸惑いを与えている。津波で浸水した災害危険区域内に設定した移転促進区域の土地買取りをめぐる事例を紹介してみたい。仙台市や石巻市は宅地であれば震災前に更地であったとしても買い取っている。しかし、名取市、岩沼市、気仙沼市などは震災前に建物があつたことを条件に宅地を買い取る方針で、更地であった土地は対象外としており、不公平であると住民から不満の声があがっている。名取市閑上地区に定年後家を建てる計画で土地を買い求め更地のままにしていた仙台市在住の男性が声を上げたことからこの違いが表面化し、先月から名取市はようやく各自治体の対応について調査を始め、実態を把握したうえで国や県と協議する方針を打ち出した。これ以外にもこのような地域による扱いの差はいろいろな面であるようである。

被災地ではどちらかと言うとハード事業が復興の指標になっているが、4年目に入っても何も変わらない被災地を歩いてみて痛感することは、元の生活を取り戻すまでの当面の生活支援に加え、例えば将来の移転先集落存続へ向けたソフト面の事業展開といったようなものが今から必要であるということである。また、地域住民自らが考え行動して行くことは当然であるが、ここまで長引くと将来を担う若い世代を中心にした地権者以外の意見も聴きながら進めることも大事であろう。

今被災地を訪ねると見渡す限りがれきは片付き、工事関係者のほかはほとんど人の気配はなく、小鳥が囀りトンボが飛んでおり、この奇妙ともいえる静かな光景が当時の生々とした惨事の記憶と結びつかない。百聞は一見に如かず、見て分かることも多いと思ひ先ずは現場を見てくださいとあちこちで話しているが、この光景を見てもらっても実際に被災した人々が現に直面している問題はなかなか分かってもらえないのではないかという気がする。復興まちづくりをめぐる合意形成の難しさや個々の生活再建の遅れなど、4年目の被災地には被災した当事者の言葉なくしては伝わりにくい問題が山積していることを改めて実感しているところである。

以 上

つくしくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役に立たないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥る現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくしくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくしくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。



江口春畝様 (会員)

平成 26 年 10 月(第 8 卷 4 号)貝坂倶楽部

発行所 NPO つくしくらぶ出版

102-0093 東京都千代田区隼町

2-12 藤和半蔵門コープ 801

email tpine304@nifty.com